京都大学新聞
学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都(08111)(学内142甲)
振替・京都3909
1部(10円)

京都科学シンポジウム開かれる

十一月二十八日（日）、理学部大学院教養・基礎科学、京都科学シンポジウム実行委員会主催による京都科学シンポジウムが「科学の歪曲、解釈と組織」というテーマのもとに行われた。午前中全体会議で、「科学の歪曲」（谷田貝義雄）、「組織形成」（中村）と題する二講演が行われた。午前中の全体会議の内容は、「科学の歪曲」の問題、「組織形成」の問題、「原子力平和利用の問題」、「原子力の実験」の問題の四分野の問題別共同討議とされ、各分科会毎に分れて討論が行われた。午後の分科会は、「科学の歪曲」分科会（谷田貝）、「組織形成」分科会（中村）、「原子力平和利用の問題」分科会（原）、「原子力の実験」分科会（原）の四分科会に分れ、各分科会毎に、「問題提起」、「討論」、「総括」の順で進められた。今年は二回目の開催であるこのシンポジウムは、「科学の歪曲」の問題を中心に、「原子力の問題」、「組織の問題」、「原子力の実験」の問題を中心に

国家のイメージと大衆ナショナリズム

吉本隆明

=上=

目立つ古典回帰の志向

―現代における喪失感の表徴―

文献整理の不備目立つ

田畑　忍

興味ひく時代区分

―ことばと政治の関係―

国家の幻想の共同性

我々の自己幻想は、それを遥かに越える

学園評論

「個人の生活」を掘り下げよ

日韓調印の中間総括

学園短信

同大、学館入館式開催

人間性の出版社＝河出書房

河出書房／東京神田小川町3の6／振替・東京10802

"新文学"の胎動……

三〇年の伝統を賭けて世に問う

書き下ろし長篇小説叢書

江藤　淳　阿川弘之氏、堀辰雄氏の長篇小説を軸かに語る。

三島由紀夫　そのなかに、私も参加した「文学の自己」を、ある意味で、ひとつの時代の象徴ともいえる。

第1回好評発売中！

高橋和巳　書きおろし四〇〇枚

憂鬱なる党派

第1回文芸賞「悲の器」につづく第二作

政治と社会と愛に賭けた、戦後の学生たちの栄光と挫折、それは憂鬱なる党派の屍なのであろうか？『邪宗門』を『朝日ジャーナル』連載中〉の作者が〝青年よ、いかに生きるか〟を現代に問う大長篇問題作！

（400頁・四六判函入り上製・定価500円）

■以下統刊

真継伸彦　光る聲

井上光晴　神の鼻の黒い穴

小田実　抱擁

開高　健　ある日、都は……

丸谷才一　笹まくら

辻邦生　夏の砦

小田実　現代史

長篇小説募集

第7回

懸賞小説募集

錯乱の時代へのアプローチのために

京都大学新聞社

本社では第七回懸賞小説募集を行います。既成の観念にとらわれず、新しい視角からこの錯乱の現代にアプローチする新人を登場させるというのがこの企画の意図です。今は「文学」氾濫の時代ですが、また沈滞の時代でもあります。それだけに一層、新鮮な文学が要求されています。

過去六回の募集には、全国大学諸兄姉から多数のご応募をいただきましたが、前回は入選作なしという低調さでした。今回は昨年同様、井上光晴、野間宏両氏に選者をお願いすることになりました。諸兄姉の力作を期待します。

◇応募資格　大学、大学院に在学中のもの（学外内を問わず）未発表のものに限る

◇枚　数　五〇〇字詰原稿用紙三〇枚以内

◇締切日　昭和四十一年三月末日

◇発　表　昭和四十一年五月下旬　本紙上

◇賞　金　入選（一篇）三万円　佳作　五千円

◇送り先　京都市左京区吉田　京大構内、京都大学新聞社小説係、

（原稿には、住所氏名、大学名、学部、学年、年令を明記のこと）

なお、原稿は本社に返しません。原稿はお返しします。

選者　井上光晴氏　野間宏氏

現代科学の黎明

科学方法論をめぐって

哲学　上田泰治

自然科学の発達に基く実験、観察技術の発達のみにもとどまるものではなかった。そこには具体的な理論を通じ至る古代の科学方法論の発達が伏在していた。もちろん人間の生きる自然を観察し対象として分析しつつ、さらに発展して来たのではなく、むしろ観察と自然観察の間の思想的関係と、それに対応する思想の方法論の歴史的展開をとりあげて「現代科学の黎明」は第三回としてこの哲学者の立場から思想史に科学方法論の歴史的展開を辿ってみようとする。

論理的方法としての科学の方法

科学の方法の歴史的展望を考察するにあたって、まずこれをおいておくべきことがある。第一に、科学とは何であるか、第二に、その成立を条件づけるものは何であるか、科学の歴史的展開の方法はどのようなものであるか、第三に、科学の方法を歴史的に考察するにあたって、何を問題とすべきであるか、などである。

科学の方法の歴史的展望を考察するにあたって、まずこれをおいておくべきことがある。第一に、科学とは何であるか、第二に、その成立を条件づけるものは何であるか、科学の歴史的展開の方法はどのようなものであるか、第三に、科学の方法を歴史的に考察するにあたって、何を問題とすべきであるか、などである。

科学の方法を歴史的に

戦後民主々義における自我（1）

すぎもと　けいき

「自我」の生産性とは

磯田光一の「エゴイズム」

家族構造の二重性

戦後民主々義の真摯な問題は、日本プロレタリアートの強靭な思惟の産物としてよりも、むしろ、家の近代的民主主義の産物として、問題、提起されるべきであったのである。「戦後」という時代は、「戦前」という時代が、今の歴史的現実をもたらしたように、「戦後」という時代の、今の歴史的現実をもたらしつつあるのである。

ところが、この「戦後」という時代の、今の歴史的現実は、どうであるか。

「戦後」という時代は、「戦前